

# 学校教育における環境教育の課題調査とその解決に向けての考察

中村 敦子（滋賀大学大学院・環境教育専修）

## 1. はじめに

滋賀県において 1970 年初頭から自然愛護教育として始まった環境教育は少しずつ進行していると思われるが、環境教育の目標の達成には依然多くの課題がある。そこで、滋賀県の学校教育（特に小中学校）に焦点をあてて、学校教育現場における環境教育の現状を知り、課題を探るため、環境教育に積極的に取り組んでいる 11 名の先生方にヒアリングを行った。

## 2. 調査結果

### 2-1 環境教育を行う上で大事にしていること

多くの先生は次のことを大事にしていた。授業をつくる上では、地域のさまざまな人材との関わりや体験活動を取り入れること。子どもたちが地域のすばらしいものを知って残していかなければならないと感じること。子どもたちが地域の住人であることを感じる。体験活動に関しては、子どもの頃に体験して感じ取らせることによって、成長したときに行動することができるかと期待している。さらに、体験に加えて、事前と事後の学習を大切にすること。先生が授業の素材を見極め確かな授業計画を立てること。

### 2-2 環境教育が進んでいるかどうか、環境教育が進んでいない場合の課題点

各教科の教科書等で環境問題に関連した内容が含まれるようになったことから環境教育は進んできているとの回答が多かった。しかし課題点も多く、先生の意識の低さが指摘された。他の教科では指導内容が決まっているが、環境教育には指導要領がない。難しく考えすぎる先生や環境教育の指導案を作ることのできない先生が多いこと、実践時間の減少によって体験だけで終わってしまっていて行動につながっていないこと、単発の学習になってしまうことなどの意見があった。また、授業や活動を引継ぐのが難しいこと、実績が積み上がってないために良い指導案が残らないこと、学校間での連絡交換のなさも課題点であった。現場以外では、地域・学校によって差が生じていること、基本法や条例などの認知度の低さ、学校と各種団体との連携や協力の少なさ、県の環境教育支援機関の認知度の低さなどがあげられた。

### 2-3 環境教育を進めていく上で、必要であると思うもの

教育制度の改変や行政からの支援といった意見もあったが、11 名中 8 名が環境教育に関する教員研修や教員養成時のカリキュラムの充実をあげ、7 名が環境教育実践者のネットワークが必要であると述べた。「～すべきである」「～しなければいけない」という想いを持って環境教育を行うのではなく、自分も楽しまなければならない、そのため、教員研修においても、楽しみながら知識を身につけることのできるものが良いという意見が多い。実践者のつながりに関しては、同校種間での連携だけでなく幼稚園・小学校・中学校などの縦のつながり、各種団体や企業との関わりも必要だという意見があった。また、県の環境教育支援機関の役割、機関と現場とが一緒になって環境教育の授業を作り出していくことも大事であるという意見もあった。

## 3. 考察

学校教育の中での環境教育を支援し、進展させていくためには、現場の先生たちに環境教育の必要性を感じさせ、教師の質をあげるような研修の場を設けることが必要である。また、環境教育というものを難しく捉えるのではなく、おおらかに捉えさせることも必要ではないか。そして、先生が環境教育の必要性を感じ、連帯感をもって実践することが望ましい。全ての先生が環境教育の実践に長けている必要はないが、意識をもつことによって、全体の連帯感も生まれ、何かやろうというときに系統だった学習ができると考えられる。その上で、地域にあった学習の方法や教科の中での環境教育のモデルを示したり、このようなこともできるという指針を示したりすることによって現場の先生も環境教育のねらいを持った授業を組み立てることができる。また、学校間だけでなく地域や各支援機関とも協力し合うべきである。